

札幌とノボシビルスクの架け橋になったこと。

中学3年 渡辺 愛結

*国際交流事業との出会い

2年生、春と冬の境界の3月。学校で配られた一枚のプリントが、ふと目に留まった。海外ホームステイ参加者募集！と大きく書かれたそのプリントが、この国際交流事業を知るキッカケだ。私は以前から外国の文化に興味があった。多分それは自分の通う学校が国際交流を重要視していることが多く影響し、その中を通して国際交流の経験が「知る」だけでなく「触れ、たい」と強く思った。そして部活動で日本文化を学んでいる視点から見ても、「得る」だけでなく「伝える」の事業に強く惹かれたことが志望の動機だ。

*ノボシビルスクでの国際交流体験について

ノボシビルスクでは、本当に様々なところに連れられて頂いた。都立公園、ガリレオパーク、動物園、ノボシビルスク駅、伝承館など。その一つひとつがどれも新鮮で魅力的だ。写真にあるノボシビルスク駅はシベリア鉄道の中間に位置する駅で貨物列車の他、多くの方が移動手段として利用しており、まだ戦争のあった時代には重要な役割を果たしていたそう。中にはホテルのロビーのような佇まい、椅子が沢山並んでおり多くの方が列車を待ちながら休息をとっていた。札幌駅と比較してみても、雰囲気は真逆であるように感じられとても驚いた。帰りの車に乗っている時、ちょうど貨物列車が通り過ぎて行ったため、何両編成があるか気になり、教えてみると5両編成であり私もまた驚いた。

家族では、バディは英語が通じずコミュニケーションが困難になってしまっていたことが多かった。私も身振り手振りや伝わりた。時は文明の力(笑)を借りてなんとか意思疎通を図った。その手代えがほんとに嬉しかった。朝、夜の食事も美味しかった。日本の食事とはかなり異なっており、甘味のが多く、プリン(パンケーキ)にはミルクソースやサワークリーム、ジャムをつけていて濃い味に感じていたが、私的にはアイスバーが一番美味しかった(笑)食事の後何度かバディと英語で会話をした。アニメの話、音楽の話、家族の話、学校の話。一番印象に残っているのは将来の話で、私たちが同じ小児科医という目標をもち、そのための一歩先を走らなければならない。私は憧れている。



* 違い

ノボシビルスク(ロシア)と札幌(日本)の違いも、様々な場面、様々な視点で実感した。到着してすぐに実感し、そして一番困難だったのはやはり言語の違いだ。ロシアは英語圏外だからだ。空港の案内やアウソスの意味が分からず戸惑ったり、ホームステイ中の会話が上手くいきななかったりといった具合に、言語の違いによる困難を目の当たりにした。皆と一緒に行動するときには複数人の通訳さんがコミュニケーションの手助けをしてくださったが家では当然ながら日本語は一切通じず、英語もボディビレしか通じない。そんな中でもいつも気にかけて戸惑わせてくださったり、私の不器用な英語に添えてくださったり、ホストファミリーのおかげで、9日間を楽しく過ごすことができた。そのようにして言語の違いを越えたりも、私たちは互いの文化の違いにも触れ合うことができた。ロシア生活伝承館での人形作りでは実際に作る工程も見せながらロシア語の説明が分からないうちに私に解説してくれた(写真)。家で折り紙をした時、一所懸命に私の話を聞いてくれた。私も折ったことがないものに、2人と一緒に挑戦することもできた。ロシア人は笑わない、なんて話を耳にするところがあるが、それは口真っ赤な嘘だと教えてほしい。今、私のカメラロールは笑顔で溢れており、そして9日間の中で、ホストファミリーと、さらに他の回員仲間のホストファミリーとも、笑ったのが、6日はない。小さなことでも、そこに行き着くまでが困難でも笑い合えたことも嬉しく思う。



* まとめ

初めてのホームステイは、困難もあったが驚きと楽しみのオンパレードだった。違いこそたくさんあったも、それを楽しむ、興味に変えることができれば自分の中の常識の概念を覆すことにも繋ぐことができた。やはり「知る、だまごはなく「触れる、」こそが国際交流における最大の魅力であり、世界の見方すら変えることが可能であると感じた。今回の国際交流は今年も体験してきた国際交流と一口で同じ、非常に大きな経験値を与えてくれたように思う。